佛傳記者の千慮の一失

山上曹源

印度以來、釋尊傳の記者は、揃ひも揃つて、悉達太子の出家の動機の中から、最も重要なる一大事實を見落してゐるやうに思はれる。見落してゐると言つては、妥當でないかも知れんが、少なくとも、太子出家の一大動機として、取り扱はれなければならぬ事實を、極めて輕く取り扱つてゐる。否な、動機の一としてすら取り扱つてゐないのである。これは確に從來の佛傳記者の千慮の一失であらねばならぬと思ふ。

然らば謂ゆる千慮の一失とは何であるかとならば、それは悉達太子が生れて僅に一週間ばかりにして、生みの母君を亡くされたことを、出家の一大動機として取り扱つてゐない點である。即ち從來の佛傳記者は、愛別離苦といふ人生の一大悲劇を、太子出家の動機の一に數へることを忘れてゐるのである。彼等は淨飯大王の親耕式に際して、太子が瞻浮樹下で冥想して居られたことや、四門出遊などを描き出して、恰も出家の一大動機なるが如くに取り扱つてゐる。

抑も悉達太子は、東西南北の四方の門から、馬車に乘つて出遊せなければ、人間の世界に、病人のあること、老衰者のあること、又は死人のあることを知られないほど、人間世界と沒交渉であつたであらうか。想ふにこれは佛傳記者が九重の雲深き處に、お育ちになつた太子樣は、普通の人間と異つてゐられた點を、描き出さんがために、案出した一種

の物語ではなかつたらうか。換言せば幼年時代に於ける王子樣方の宮中生活は、普通の人間世界の生活から、如何にも懸け離れてゐた有樣を力說せんがための文學的作品ではなかつたらうか。世の中に「馬鹿殿樣」といふ言葉があるが、それは「殿樣育ち」の方は、普通の人間世界から懸け離れた生活をなさるために、尋常普通の茶飯事でも、お知りにならない、お判りにならないといふ意味であつて、決して先天的の馬鹿者といふ意味ではないのである。今それ佛傳記者が、四門出遊を以て、太子出家の一大動機なるが如くに描き出したのは、悉達太子を普通の殿樣育ち的な人間として取り扱つた爲めではあるまいか。さもあらばあれ、吾人の私見を以てすれば、太子出家の一大動機は、生れて僅かに一週間ばかりにして、生みの母君を失ひ、人生の一大悲劇に遭遇し、長ずるに及んで、愈益人生の淋し味を痛感せられた點にありて存すると信ずるのである。

悉達太子を哺み育てた婦人は、太子の御生母摩耶夫人の妹君、卽ち太子の叔母君に當るプラジャーパティと云ふ御方であつて、後には釋尊の弟子として、比丘尼になつた程の賢夫人であつたから、世の謂ゆる繼母とは、固より撰を異にしてゐられたに相違ないが、然し人間は畢竟するに人間であるから、眞實の生みの母子(おやこ)のやうに、兩者の感情が、ぴつたり融合することが出來なかつたらうと察せられる。そして此の種の悲劇は、その主人公をして、不良な人物たらしむる場合が十中八九である。蓋し人間敎育の上に於いて、母の力の偉大なる感化力を有するとは、幾多の事實によつて之を立證することが出來るからである。スマイルスの如きは、其の名著「品性論」の中に、父親は如何ほど無賴漢であつても、母親さへしつかりして居れば、子供は立派な人間になれるといふことを力說してゐる。これは勿論、あまりに極

端な言ひ方であらう。教育上の理想から云へば、父親の威嚴と、母親の慈愛と、恩威並び行はれることが必要であるから、母親の溫かき慈愛の外に、父親の犯し難き凛乎たる威嚴があつて欲しいのである。然しながら秋霜の嚴しさよりも春風の和やかさが、一切の草木を生長せしむるやうに、子供の教育には、母性の溫かい慈愛の力が、不可缺の重大要件たるべきは、何人も異議なきところであらう。何となれば子供の人間らしい微妙な心情は、實に春風の如く和やかな母親の愛情によつて培ひ養はるゝからである。

哲人ペスタロッチは人間の教育上、生みの母が、生みの子を哺み育てることが、何處までも原則でなくてはならぬことを高調して、「自然は母親に對して、母親自らが自分の手によつて、其の子を世話せなければならぬことを命じてゐる。此の故に母親は其の子の教育を放棄してはならない。又それを何人の手にも委ねてはならない。世間は廣い、然しながら何人と雖も、子供に對して、母親に代り得るものはない。子供は又母親にとつて、何ものにも代へ難いものである。人間の愛と感謝と信頼の芽生は、實に母親によりて、よりよく發達せしめらるゝものである。世間多數の人々の聲の中で、子供にとつて何人の聲よりも、最も好ましい聲は實に母親の聲である。子供の心胸は波打つ、そして母親が話しかけさへすれば、愛は必ず子供の唇の上にほゝえむのである。母親は子供にとつて、一切であり總和である。母親は如何なる事情の下にも、又如何なるものゝためにも、耐へ忍ぶことを欲しないことを、又爲すことを欲しないことを、子供のためならば、喜んで之を爲し、又喜んで耐え忍ぶのである。母親は子供のためならば、自分自ら再び子供となることを敢てし、彼等に子供らしい精神を呼び覺まさせるためには、自ら子供らしい行ひを爲すことを、最大の術として尊重

するのである。此の意味に於いて、母親は永遠に、如何なる教師も及ばないほど立派な教師である」と言つて居るが、實に謹聽し傾聽すべき至言である。

由來人間の歴史は何人の力によつて織り出され、且つ何人の力によつて色採られて居るかと言へば、其の一面においては、確に古來の無名な、併しながら眞面目な母親によつて織り出され、且つ色採られてゐるのである。即ち其等の女性達は、立派な母親として己れの生みの子を哺み育てたのである。が、併し其の名も功績も、餘り多く世間に傳へられて居ないのである。されど其等の母親達こそ、眞に椽の下の力持として、人間世界の歴史を織り出し、且つそれを色採るべく、本當に人生をうるほして呉れたのである。斯の如く世間に知られずとも、世間をうるほす力となるといふことが、世の母たるもの、覺悟でなくてはならぬ。

獨逸の教育思想家ジャン、パウルといふ人は、「父親は詩人をつくり、學者をつくり、軍人をつくるが、母親は人間をつくる」と言つてゐる。これは吾々の大いに味はなければならぬ金言である。

予の知人、陸軍少將本庄庸三氏の調査報告によれば、幼にして母親を失ひ、父親及び繼母の手によつて育てられたものと、幼にして父親を失ひ、母親の手一つで哺まれたものと、此の兩者を一個聯隊の兵士の中から撰り分け、兩者の孰れが兵士として優れてゐるかを、有ゆる觀點から比較檢討して見たら、幼にして片親の孰れかを失ふことは、人生の一大不幸事に相違ないが、幼にして父親を失つて、生母一人の手によつて育てられたもの、方が、幼にして母親を失ひ父親及び繼母によつて育てられたもの、方よりも、遙に優れてゐるといふ結論に到達したそうである。以て生みの母親

が、人間の教育上如何に重大な位置を占めてゐるかを察すべきである。然るに我が悉達太子は生れて僅に一週間ばかりにして、生みの母君を失ひ給ふたのであるから、普通ならば劣等兒若くは不良兒の仲間に、お入りになるべき境遇であらせられたのである。が、然し古今東西に於ける第一最大の聖人となり給ふた程の御方であつたから、先天的に異常な才であつて、偉人たり聖者たるべき特質を具備し給ふたと同時に、生みの母君に死別されたといふ最大の逆緣が、太子を激勵して、最高最尊の順緣を創造せしめたものと拜察されるのである。換言せば太子が、生みの母君を失ひ給ふたといふことは、人生最大の悲痛事には相違ないが、併しそれが却つて太子出家の一大因緣となり、三界の大導師と仰がれ給ふ原因の一となつたのである。謂ゆる鐵を轉じて金となすの活作略妙手段とは、蓋し是の如き事例を形容する爲めに造られた言葉であらう。之を要するに今後釋尊傳を編まんと欲するものは、須らく悉達太子の出家の動機に關して、太子が生れて僅に一週間にして、愛別離苦の一大悲劇に遭遇し給ふた點を見落さないやうにして貰ひたいものである。これ人間としての釋尊を論ずるもの、用心すべき重要な事項であると思ふ。

（了）